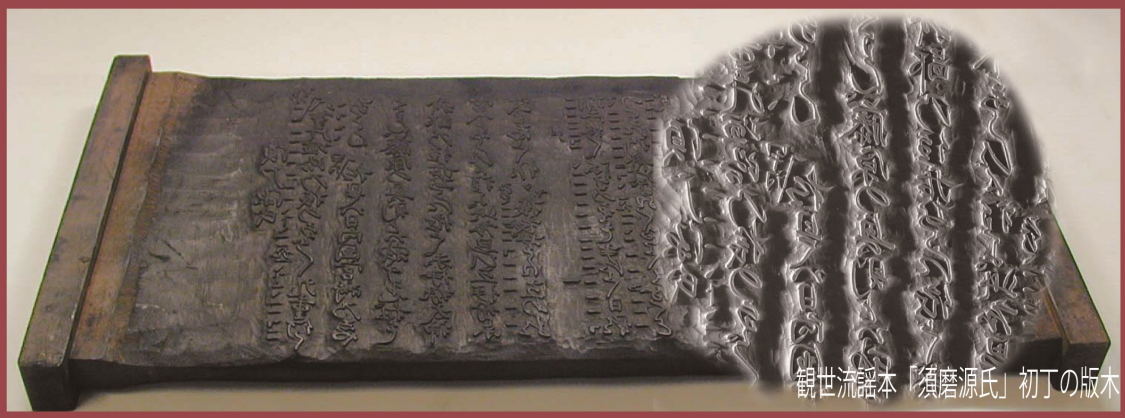


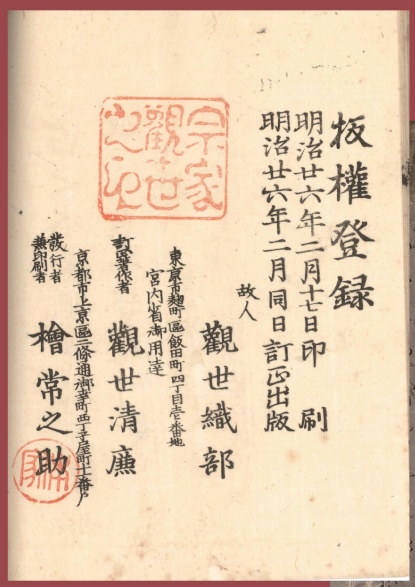
観世流謡本「須磨源氏」初丁の版木

版木と近代の木版本

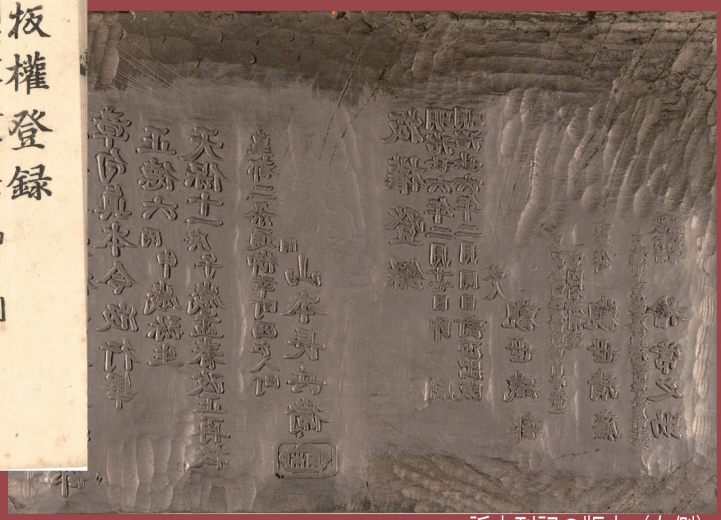
―檜書店旧蔵の版木から―

展示図録

明治 26 年檜常之助刊観世流謡本の刊記



版權登録
明治廿六年二月十七日印刷
明治廿六年二月同日訂正出版
故人 觀世織部
東京市麹町區飯田町四丁目壹番地
宮内省御用達
著作者 觀世清廉
京都市上京區三條通御幸町西入屋町壹番戸
發行者兼印刷者 檜常之助



謡本刊記の版木（右側）

版木と近代の木版本

―檜書店旧蔵の版木から―

古典芸能研究センターは、謡本・能楽専門出版社の檜書店から寄贈を受けた版木3,300枚あまりを所蔵しています。版木は文字などが彫刻された板で、木版印刷（製版）に使われます。木版印刷は一般的に近世のものとされ、近代に入ると特別な美術品以外は活版（金属）や石版・銅版印刷に変わったと思われがちです。しかし実際には、明治半ばまでは木版による出版も多く、檜書店も明治末頃まで版木を使っていました。現在センターが所蔵する版木はその一部です。

この大半は謡本用ですが、能関係の解説書や仕舞の型を記した型付用のものも含まれています。サイズや年代も多種多様です。センターでは、これらの版木を「檜書店旧蔵版木データベース」として公開しています。これまでは、版木の中の文字が彫られた部分だけの写真しか見ることができませんでしたが、この度、版木全体の様子がわかるカラー写真も追加しました。そこで、この機会に、版木とそれを用いて作られた版本の展示を行います。なかには、銅版刷の本でも題簽だけは木版という場合もあります。近代になっても、版木が幅広く使い続けられていた様子をご覧ください。

〔展示構成〕

日本の木版印刷のあらまし

版木について

木版印刷（整版）のしかた

センター所蔵の版木について

檜書店について

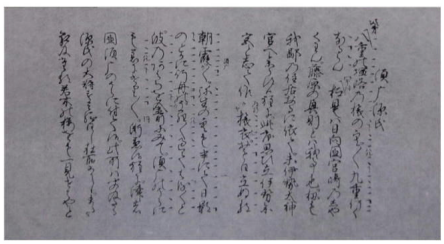
　沿革／出版をめぐって／木版出版略年譜

版木と木版本

　版木のサイズいろいろ／近世刊行書の再版とそこからの広がり／檜の新しい試み／謡本の刊記いろいろ／本の改定と版木の修正／特別サイズの版木／木版刷から石版刷へ

「檜書店旧蔵版木データベース」について

観世竜謡本「須磨源氏」第１丁の版木



上掲の版木で摺った「須磨源氏」第１丁

明治14年刊観世竜謡本の表紙（左、「須磨源氏」所収巻）と刊記

日本の木版印刷のあらまし　―近世まで―

日本の木版印刷は、飛鳥時代、中国大陸から仏教や製紙技術とともに伝来したとされている。年代の明確な最古の印刷物は、770年に法隆寺におさめられた経典「百万塔陀羅尼」である。以後、鎌倉・室町時代に至るまで、寺院を中心に経典や仏教版画が製作され、限られた人々の間で享受されてきた。これらは、一枚板に図案を彫刻して摺る整版印刷で、奈良の興福寺を中心に作られた「春日版」、高野山の「高野版」、京都五山などの「五山版」などが知られている。江戸時代までの出版文化を支えていたのは、寺院であった。

安土桃山時代になると、外国から活字を使う活版印刷術が渡来した。活版印刷は、文字や単語ごとに木や金属に形を刻んだ版「活字」を作り、組み合わせて版を成形し印刷する。天正年間（1573～1591）には、キリスト教の布教活動にともなって西洋から活版印刷術がもたらされ、また、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄の役、1592～1593）を機に朝鮮式活版印刷術も伝えられた。後者は、後陽成天皇や徳川家康などが関心を寄せ、印刷・出版事業を推進した。

一方、寺院においても従来の木版に加え、新たに活字を用いての印刷・出版に着手し、慶長年間から寛永中期頃までは木活字による印刷・出版が盛んに行われた。木活字による出版は民間にも広がり、本阿弥光悦や角倉素庵らによって「嵯峨本」が刊行されている。

近世初期のこうした活字印刷（「古活字版」）の興隆は長くは続かず、1640年頃を過ぎると衰退し、従来の木版（整版）に座を譲ることとなった。その理由は、活字を用いた出版が小規模出版には向いていても大規模出版には向いていないこと、あるいは膨大な数の漢字や続き文字の平仮名の活字を作るよりも一枚の板に彫って印刷するほうが時間・労力・コストが節約できること、また再利用も可能といったことであった。また、整版であれば、絵を入れることも容易だったこともあろう。日本の印刷史では、活字印刷から再び一枚板の木版印刷へ戻るという、ある種の逆行現象がみられたのである。

江戸時代初頭には、京都の町衆によって営利目的の出版事業が始められた。従来のように僧侶や貴族などの特権階級に限らず、一般の庶民が気軽に書物と親しめるようになったのは、この頃以降である。さまざまなジャンルの書物が出版され、これまでは文字主体であった書物に挿絵や挿図などの図版が多く使われるようになり、読者層は一気に広がった。言うまでもなく、能楽関係の書物についても、各種の謡本や一般向けの入門書や啓蒙書などが、様々な形態で数多く刊行された。

版木について

版木（はんぎ）

「**版木**」は、木版印刷（整版）を行うために文字や絵を彫刻した板をいう。「**版木**」とも書き、「**彫板**（えりいた）」、「**形木**（かたぎ）」ともいう。薄い紙に本の一丁分を清書して**版下**（はんした）（印刷原稿）を作り、これを裏向きにして板に貼り付（じょうし）け、その上から彫った。板材としては、中国では、ナシ・ナツメのほかアズサ(梓)が使われた(＊出版を上梓というのはこれに由来する)。日本ではやサクラが最も多い。これは、切削りが容易で文字行面がきれいに仕上がること、墨との着色性に優れ、時間が経つに従って硬く丈夫になるので、狂いが少なくかつ耐久性があるといった理由による。

製版（せいはん）

木版印刷には、板木を用いる「**整版**」と、版木ではなく木製の活字を用いる「**活版（活字版）**」がある。

整版は、版木に墨をつけ、上から紙をあてて馬棟（ばれん）でこすって印刷する方法で、現在でも行われる版画の要領である。江戸時代を通じて広く行われ、出版された本の大半は整版によるものであった。この方法だと１枚の板にページ全体がすべてが収まっているため、挿絵やふりがななどが簡単に入れられるという大きな利点があった。

＊木版整版の印刷・製本作業の工程

江戸時代には、版下作成から製本に至るまでの仕事は分業で、それぞれ専門の職人が担当した。版木を使って印刷する作業をするのは摺師であった。

①版下書…原稿（「版下」）をきれいに浄書する。
②彫師…浄書原稿を版木に貼り付けて彫刻する。
③摺師…彫刻された版木を使って紙に印刷する。
④経師屋…印刷した一枚一枚の頁を揃えて製本する。
表紙をつけ本を綴じ、書名を印刷した紙（題箋）を表紙に貼る。

木版以外の製版印刷

銅版刷

銅の板を彫って表面を凹版にし、インクを流して印刷する方法。天明３年（1783）に司馬江漢が西洋の書籍から学んで始めた銅版画に始まる。当初この手法は本の挿絵のみに使われていたが、文政年間（1818～29）頃から全体が銅版印刷の本が現れた。銅版本は明治初年代にはまだ少ないが、10年頃から盛んになった。全盛期は明治20～30年代で、一般に広く行われている。

石版刷

石版石に特殊のインクで書写した原稿を転写して整版印刷する方法。水と脂肪の相反発する性質を巧みに利用する。1798年ドイツのゼーネフェルダーが発明した。石版石の表面に脂肪を受け付ける画線部分（インクがつくところ）と水を受ける非画線部分（インクがつかないところ）とを化学的につくり、脂肪性インクをつけたローラーを石版上で転がすと、脂肪性である画線部分のみがインクを受け付ける。この方法は色がきれいに出るのが特徴である。日本には明治時代に技法が伝えられ、額絵、雑誌付録などの印刷に利用されたが、樹脂凸版によるカラー印刷（原色版印刷）が始まり、また金属平版が発明されるに及んで、重くて取扱いの不便な石版はしだいに衰退した。

版木の大きさや版面について

版木（板木）とひとくちにいっても、本の寸法や用途によってさまざまなものがある。詳しくは後掲の展示をご覧いただきたいが、版木の大きさは、まず必然的に「大本」「半紙本」といった出来上がりの本のサイズ（書型）に対応している。

さらに、１枚の板に本の何丁分を彫るかによっても大きさが異なる。版木は、片面に版本の１丁（半分に折って袋綴じにして製本するので、洋装本の見開き１ページ分に相当する）、あるいは２丁分を彫ることが多い。版本の１丁を１面として両面を用いるものを「２丁がけ」、２丁を１面とするものを「４丁がけ」などという。

ちなみに、両面に文字が彫られている版木は、表と裏とは上下が逆になっている。これは、表を摺った後、そのままひっくり返すと裏が正位置で現れるという仕組みで、印刷にかかる手間を少しでも節約する工夫である。片面で２丁分印刷ができる４丁がけの版木は、同様の理由から、同じ面の丁もそれぞれ上下逆さまになっている。

版木の厚さについて

版木の中には、表面が削られているだけで何も彫られていない状態の版木もある。売れなくなったり絶版になった本の版木は、版面が削られ表面を磨いた後に他の本の版木として再利用された。厚さの薄い版木は、何度も再利用されたものである。基本的には版木は消耗品であり、摩滅して使い物にならなくなると、再利用したり、処分されたりした。下に未使用の版木とはしばみを掲げた。展示後掲のさまざまな版木と厚さを比較してご覧いただきたい。

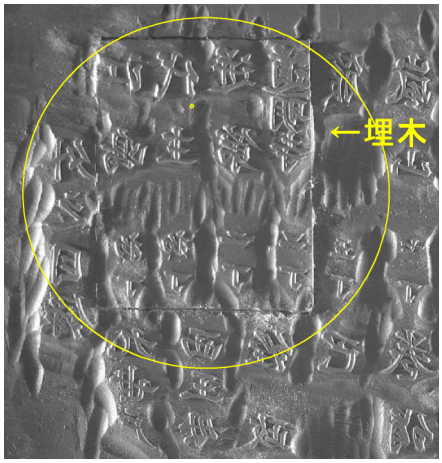
版木の保存と訂正・補修

はしばみ（端喰）

彫り上がった版木には、両端に「**はしばみ**」と呼ばれる反り止めが取り付けられる。これは、反りやゆがみ、割れから版木を守るとともに、版木同士が接して文字面が傷つかないようにとの工夫でもあった。

はしばみには特殊な切り方をした溝があり、版木本体の両端の凸状の部分をスライドして取り外しすることができるようになっていた。この反り止めの形式は時期によって変化しており、後には単に木片を釘で打ち付けるだけになったとされている。（センター蔵の版木には、スライド式のものは非常に少ない。）　また、大量の版木を保存する場合には、側面に書名・該当丁数等を書いて整理していたようである。

A　観世流謡本「須磨源氏」版木　第一丁　半紙本用



埋木（うめき）

版木が彫りあがった後に部分的な訂正が必要となった場合、該当箇所を削り、新たな内容を彫った木片をその部分に埋め込んだり、新しく木を埋め込んで彫り直した。これを「**埋木**（うめき）」あるいは「**入木**（いれき）」と言う。

O　『仕舞謡大成』版木　横本用　別能目録（部分）

A　観世流謡本「須磨源氏」（第一丁）版木　半紙本用　一枚　588（整理番号、以下同）

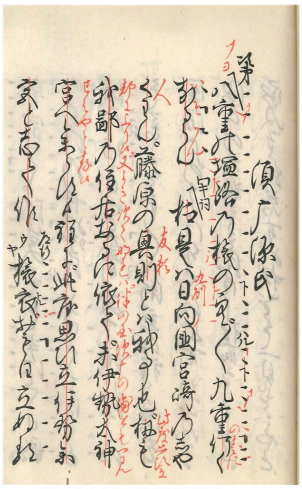
＊「直シ」
…個々の部分をどのような音高や謡い方で謡ったらよいかを示す記号や符号などを言う。基本的には、師匠によって個別に書き加えられ、伝承されるものとされてきた。

「須磨源氏」冒頭（第１丁表）の字面各種

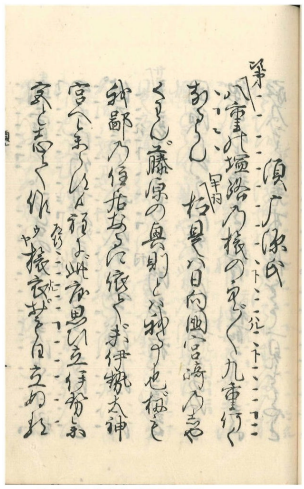
左：檜の再版の元になった山本長兵衛刊謡本

中：左の山本長兵衛刊謡本をもとにして再版された謡本

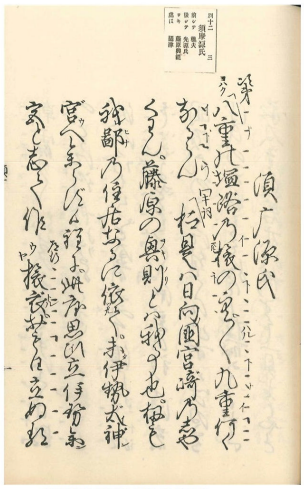
右：明治14年刊本をもとに、ふりがなや直シを加えて新たに作った謡本



天保11年山本長兵衛刊観世流謡本
「須磨源氏」冒頭部分（第１丁表）



明治14年檜常介刊観世流謡本
「須磨源氏」冒頭部分（第１丁表）



明治32年檜常介刊観世流謡本
「須磨源氏」冒頭部分（第１丁表）

B　新作能「三韓」「卯花重」版木　刊記・題箋　　半紙本用　一枚　492

高木半は明治初期から能楽改良運動を提唱し、「忠臣孝子節婦の実伝」による「勧善懲悪の一助ともなるべきやう」な「新楽」「新能楽」を作り続けた人物。高木の新作能は上演もされ、計10番が刊行された。「卯花重」は、頼朝に捕らわれた静御前の貞淑さを描く。「三韓」は神功皇后の三韓征伐物語に取材した作品。

この板木は、３ヶ所（写真の白線部分）埋木で修正がされている。「三韓」「卯花重」の題箋とともに彫られているので、両曲の刊行時に使われた奥付を再利用したらしい。

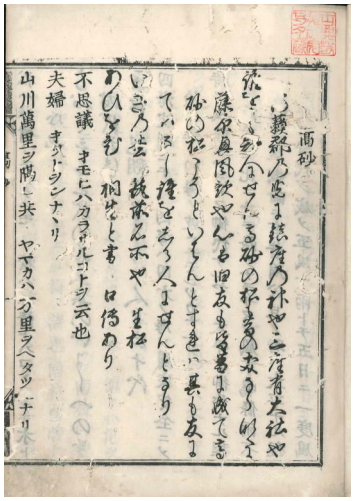
C　観世流謡本「多賀」版木　刊記　　半紙本用　一枚　725

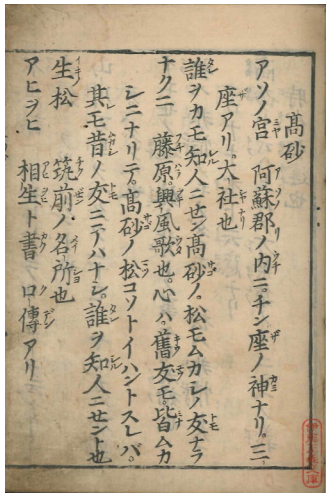
近江多賀神社の神徳・縁起を題材とする曲。34年10月の宮司岡部譲の識語があり、同社の能楽堂再建を記念して、社人大口祀善（玲瓏）が作詞し、識者に節付を乞うた由を記す。著作兼発行者は大口、印刷者が檜常之助。朱印部分は「官幣大社多賀神社蔵版」の朱印。

檜は、神社や奉納者の依頼をうけて、他にも寺社のための新作の謡本の刊行を担当した。京都今宮神社のやすらい祭に取材した新作曲「夜須良為」（明治31年11月刊）、近江日牟禮八幡社に能楽堂を建築する時に作られた新曲「日触詣」（明治32年11月）などである。いずれも使用頻度が低かったためか、丁数の残存状況は良好である。

〔古活字本と整版本〕

『謡抄』２種
左：古活字版
右：整版





左：**古活字版「謡　抄」**
（高砂・老松・難波・放生川・呉服・金札・御裳濯・養老・白楽天・矢卓鴨・弓八幡）

刊（古活字・守清本）　大本　一冊（全十冊）

『謡抄』は最初の謡曲注釈書。文禄４年（1595）３月、関白豊臣秀次の命により、五山僧や浄土宗・日蓮宗の僧、山科言経などの公家が参画して行われた注釈の成果が原形となった。この作業は、当時の謡本に仮名書きや不正確な宛字が多かったため、正しい漢字をあてて意味を明確にすることを目的として行われた。編纂作業は秀次の死によって中断したが、慶長年間に山科言経や鳥飼道晰（金春大夫喜勝の弟子、車屋謡本の筆者・節付者）らの再編作業を経てまとめられたのが現存する『謡抄』らしい。中世最末期の学問と知識の一つの姿を、当代の文化人達の個々の見識を背景として示しており、以後の謡本の本文整備や謡注釈書に大きな影響を与えた。

内容は、当初予定の100番（底本は金春流）に秀次の希望で追加された「弓八幡」「歌占」を含む全102番の注釈。この写本に基づいて刊行されたのが古活字版『謡抄』で、本書はその最古本である守清本。「道明寺」冊の《大原御幸》末尾に「守清梓刊」の刊記があり、この刊記に基づいて「守清本」と通称される。守清は経歴不明の人物で、他の出版物の刊記にも名は見えない。

センター蔵本は１曲を欠く全101曲で、「籠太鼓」冊（「班女」欠、曲順も異なる）以外は、早稲田大学演劇博物館蔵安田文庫本と巻の構成・曲順も同じ。本文は、漢字交じり片仮名楷書体と草書体とが混在。和文については行書体、その他は活字体で記すのが特色（注釈者の区別のためらしい）で、底本の写本にあったはずの返点やふりがなの類は省略されている。

右：**整版「謡抄」（高砂・八島・江口・盛久・三輪・桜川・天鼓・熊野・鞍馬天狗・融）**

刊（整版）　中本　一冊（全十冊）

寛永（1624～1643）末刊の初版（丹表紙本）から長期にわたり同版で何種類も刊行された「整版中本謡抄」の一本。親本とされるのは、框郭がなく漢字・片仮名まじりの楷書体で片面10行の古活字無辺十行本とされる。本書は正保（1644～1647）頃の刊行か。十番綴本10冊の百番構成。守清本などの102番から除かれたのは「歌占・邯鄲・金札・皇帝・三笑・石橋・大会・玉鬘・船弁慶・御裳濯・弓八幡」の11番で、新たに加えられたのは「梅枝・雲林院・鸚鵡小町・景清・木曾・桜川・志賀・玉井・仏原」の9番。

〔伊藤正義文庫〕

木版印刷（整版）のしかた

版木を使った木版印刷（整版）

（写真は平成18年コスモス祭参加企画「センターを知ろう！」時の摺刷より）

摺師：竹中健司氏（竹中木版竹笹堂）

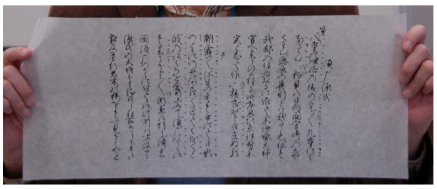
①版木を濡れた布で拭き、湿らせる

②版木に墨をつける

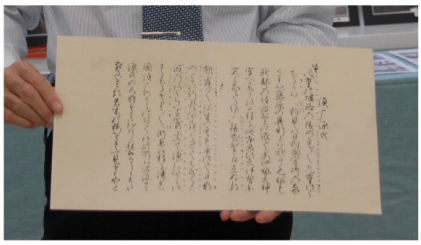
③版木につけた墨を均等にうすくのばす

使われていた時の墨色が残る版木

④版木に紙をのせる



↑
2種類の紙に刷られた「須磨源氏」第1丁。
（これを外表の袋綴じにして製本すると本の完成。）
↓



⑤紙の上からバレンで擦る

⑥紙を版木からはがして、できあがり

古典芸能研究センター蔵版木について

古典芸能研究センターは、前述のように、平成13年（2001）８月に檜書店より謡本及び能関連書の版木3364枚の寄贈を受けた。

版木の大半は近代のものだが、少数ながら近世のものも含まれている。檜書店は、近世末期に謡本書肆の山本長兵衛から版権を譲り受けた本屋で、近世の版木は、その山本長兵衛が使っていたものである（＊詳細別掲）。一方、近代の版木は、檜書店により新たに作られたもので、明治三十年代に作成されたものが多く残されている。檜書店は、他の謡本書肆が明治半ばから石版刷に移行する中、遅い時期まで木版刷の謡本を刊行し続けた。最後の木版刷と思われるのは大正４年刊行の金剛流の謡本で、刊記を記した版木で確認できる。

版木の内容は、観世流・金剛流の謡本用が最も多く、題箋や刊記等の版木も含めると全体の８割以上を占めている。謡本は、内・外二百番の揃本以外に、明治期新作能や小謡本などがある。特に新作能の版木は充実しており、なかには、寺社が特別に依頼して作らせた「夜須良為」（明治31年今宮神社刊　金剛流）、「多賀」（同35年多賀大社刊　観世流・喜多流）なども含まれている。謡本以外では、観世流の型付、謡の伝書、解説書などの能楽関係書と、ごくわずかながら『選択本願念仏集』の版木が残されている。『選択本願念仏集』については、檜書店創業の頃に、初めに刊行を手がけたのが仏書であったため、その名残と考えられる。なお、丁数が比較的そろって残っているのは、やはり明治三十年代以降の新刻や、あまり使われていないと思われる新作・番外曲などの版木である。

版木の並べ替え作業中の様子

収納棚の様子

～版木整理の経過と現状～

大正期に使われなくなった版木は、用済みのものとして、長きにわたって檜書店の蔵で横積みにされたまま置かれていました。戦時中の一時期には薪として使われたこともあったそうです。

整理はまず、埃を払い、板に残った墨を水で流し落とす作業から始まりましたが、こうした基礎作業には思いのほか時間と労力を要しました。その後、版木の大きさごとに分けて両面を撮影、反転処理を施した画像によって内容を確認して、曲名の五十音順（揃本）、同冊の中では丁順に各書物ごとに分類・整理を進め、新たに整理番号を付しました。この番号にしたがって棚換えをし、その全容を『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』２号に「檜書店旧蔵版木目録（解題・凡例・目録）」として掲載しました。その後、このデータをもとに「檜書店旧蔵版木データベース」を作成し、ホームページ上で公開しています。

現在は、本センターのある建物内の一室を収納場所として、先の目録掲載の整理番号に従ってスチール棚に立てた状態で保存しています。なお、版木の閲覧に関しては、当センター所蔵の貴重書閲覧規定に準じた扱いとしています。

檜書店について

檜書店の沿革

檜書店は、観世流・金剛流宗家謡本の板元・発行元であり、雑誌『観世』の編集発行元の能楽関連書の出版社。創業地は京都（二条通麩屋町、旧京都店所在地）だが、現在は東京に本社を置く。

檜家初代の常祐（1812～88）は、はじめ檜木屋橋本常祐（四代目）と称して京都で両替商を営んでいたが、維新後は名跡・家業を子息に譲り、以後は自身は屋号の檜姓を名乗る。文久年間(1861～1863）には書肆の同業者組合（京都書林仲間）に加入している。

慶応２年（1866)、観世流謡本板元の山本長兵衛了雲（1822～77）からその版権を譲渡され、本格的に謡本出版を手がけることになった。山本長兵衛は、直前の火災で甚大な被害を被り、焼け残った版木（すなわち版権）の買取を檜に依頼したらしい。

明治12年には、当時の観世流宗家観世清孝の協力も得て、明治初の二百番揃の謡本を刊行。観世清孝とは明治16年に宗家校訂謡本の刊行契約を結び、以後、次々に観世流の各種謡本を刊行していく。さらに、二代檜常助（1831～1903）の跡を継いだ三代目常之助（1873～1943）の時には、明治31年に金剛流謡本の版権も取得して刊行を始めた。また、明治32年からは、他の出版社と同様に、謡いかたを記した直シ入の観世流謡本を版行。明治末期には観世流の流儀謡本の主流を占めるようになり、大正期以降は、大正版・昭和版・昭和大成版（現行）と相次いで宗家公認の謡本を刊行、現在に至っている。

〔参考〕『能・狂言事典』「檜常之助」の項　（前西芳雄執筆）

旧京都店に掲げられていた看板

檜書店の旧版木庫内のようす

****

版木をめぐるエピソード　―前西芳雄氏の談話より（一部抜粋）―

「前西芳雄氏に聞く「関西能楽界の五十年」」聞き手：大谷節子

『能と狂言』第四号（2006年８月５日発行）より

前西芳雄氏

大正11年生まれ。昭和12年に檜書店に入社、平成５年に同書店を退社、翌年平成６年から13年まで金剛能楽堂財団に勤務。京都観世会館の設立準備委員、京都能楽養成会創設準備委員など、戦後の京都能界の世話役に徹した功績によって、平成４年度の法政大学能楽研究所催花賞受賞。現在は、京都観世会監事、金剛会監事、京都能楽養成会専務理事。

謡本発行所としての檜書店

大谷　長らく独稽されていた檜書店は、観世流と金剛流の謡本の版元・発行元であり、雑誌「観世」の編集兼発行、能に関わる書籍の出版で知られる本屋さんです。今も京都の檜書店では、観世流と金剛流の謡本が常備されています。かつては宝生流、金春流、喜多流の謡本も檜書店で購入できたと伺いましたが、いつ頃のことですか。

前西　それは、明治三十一年に、京都の東山太閤坦で、豊太閤三百年準祭能というのがあったんですね。四日間に渡る催しだったんですけども、五流揃っての能の催しだったんですね。それで、その時の各流の番組の謡本を売ろうという事を企画なさって、それでそれに間に合わせる様にその準備をされたんですね。今は、例えば能会に行って、そこで出る謡本がそこで売っているというのは、そう珍しい事ではないですし、それから謡本を一冊買うという事は、そんな難しい事ではない訳ですけども、当時、金剛流は一番本というのが出てなかった訳ですね。ですから、それに合わせて、流儀の一番本というのを急遽準備するという事があったんですね。それから、江島さんのとこの宝生流の謡本や金春、喜多の謡本を檜書店が預かって売らしていただいた。わんや書店と檜書店の本当の出会いは太閤坦からなんです。それまでは特に交流はなかったんですけど、その時から、お互いに謡本を行き来させるようになったのです。この事はかって檜書店に勤めておられた町田清蔵さんから度々聞いています。檜書店は、その後、ずっと各流の謡本を集めてましたけれど、やっぱり宝生・金春・喜多はあんまり売れませんので、昭和三十年頃にはもう金剛止めました。

大谷　謡本のシェアは、観世がどのくらいを占めるのですか

前西　関西では8対1対1と言うてたんです。八割が観世、一割が宝生、あとの一を金剛・金春・喜多。圧倒的に観世が多かったですからね。

大谷　あまり売れる訳ではないけれども、檜書店京都店では全流儀の謡本を揃えるという事を、ずっとなさっていたのですね。

大谷節子氏

前西　置いてました、はい。

大谷　たとえば大阪の吉田書店はどうだったのでしょうか。

前西　大阪はね、金剛は置いてませんし、観世とね、宝生だったかと思うんですけどね。

大谷　取り寄せで入手する他なかったのですね。

前西　そうですね。取り寄せです。

大谷　京都の他に行けば、各流儀の全ての謡本が揃っていた。

前西　そうですね。まあ各番で最低三部ずつ置いてました。でも、戦後になると、各流謡本はよく品切れにしておりました。京都は宝生・金春・喜多の人があんまりなかったんです。品切れにする時もありましたけど、一応やはり、各流全部揃えておりますと言ってましたからね。あまり注意をかけん程度には揃えていました。

大谷　檜書店の前身は山長（山本長兵衛）ですね。山長が持っていた謡本の版権を明治になって檜書店が受け継いだ。その山長以来の版本を、近年、神戸女子大学に御寄贈いただいたのですが、これまでどのように保存しておられたのでしょうか。

前西　版本は棚に横にはしないんです。痛みますから。こうして（図に順に）ずっと置きますからね、非常にかさばって場所を取るんです。それに大きさがまちまちで。ですからね、一部屋じゃなくて、相当大きいスペースに、棚にこう（図）向けにずっとに並べてましたけど。その時分はぜんぜん版本使っていない。あとはね平積みにして、四畳半一部屋分くらいの分量がありました。

前西芳雄氏

した。

大谷　御寄贈いただいた時には、蔵の中においておられましたね。

前西　一度も二度も場所替えさせてるんです。そこの場所をなんかのために使うとなったら、あっちやり、こっちやりいして。下ろすたんびに、結った紐が切れたりしてね。もうバラバラになってしまってたんです。それで、高さがずっと揃って、丁がずっと揃ってという置き方は、もうできてませんでした。一つはね、戦時中東京の方から檜の先々代夫人がこっちへ帰って来てまして、風呂を沸かすのに、焚きもんが無い。石炭もない。手近いのからそれを割って焼やして。あれは惜いんです。檜ですから、いや、あの……。

大谷　（笑）桜ですね。

前西　そうです。桜ですからね、堅いんですわ。なかなか割れない。女の人では。ほぞの柔らかいとこだけ焼やしていました。その後、少し石炭が手に入るようになってからは。もう止めましたけども。だいぶ焼やしてしまってるんです。

大谷　今、整理中ですが、なかなか一部分が揃わないですね。

前西　揃わないと悪います。バラバラにしてしまい、申し訳ありません。

大谷　お風呂の焚きものになっていたのですね。

前西　まあ、非常に場所を取っていたんですね。井上頼寿さんの口利きで、府立総合資料館が欲しいという話があったんですけども、目録を出してくれと頼ったんです。「高砂」が何枚、「竹生島」何枚、「田植」何枚……。それが大変でできませんのでね、目録は現在しても、こっちは目録基礎してくれというのでね。そのうち不調に終わったんです。ある書店が欲しいという話もあって大分教話ったんですけど、数知いてびっくりなさってね、これも不調に終わりました。二回行きそびれています。あの版本は、やっと三回目で貰ってもらえたというような感じで……（笑）。ありがとうございました。

大谷　御縁があって幸いでした（笑）。檜には専属の刷り師の方がいらっしゃいましたか。

前西　いました。最後は菊岡さんです。

大谷　菊岡さんからお聞きになった話はありますか。

前西　もう、刷りの仕事はありませんからね、普通の店員になってはったんです。私が知っている時は、それも辞めてはりました。最低五部、普通は二十部が刷り単位やと。私は、版本で刷るとこは、見た事がないんですけど、菊岡さんはお酒好きでね。版本を汚らすのに、口に酒を含んでプハーッ……とやるんですが、ついつい順の方にゴクッといってしまうとよく話してはりました。版本は酒の匂いがするのです。

大谷　「檜さんの鼠」は、お酒に引き寄せられたのかもしれませんね（笑）。

前西　版本を積んである所をちょこちょこ往き来するから、鼠の頭から真っ黒で、黒光りしてるんやそうです。それで隣近所に往き来するから、どこから来たかすぐ素性が知れる。「檜さんの鼠」と近所から言われてました（笑）。ちょうど昭和後は、そら、ものすごい数の鼠でした。

大谷　刷り師は、伊勢出身の方が多いと聞いたことがありますが、菊岡さんも伊勢の方でいらっしゃいましたか。

前西　いや、伊勢じゃなかったと思います。伊勢は桜が多いのと神宮の関で、版本那ったり、刷ったりする人は伊勢が一番多いと聞きました。ハンコ彫る人も、出は伊勢の人が多いんと違いますか。

出版をめぐって

出版の権利と公的な管理体制　―江戸から明治へ―

江戸時代、出版が盛んになると、本を出版・販売する書肆（書林・本屋）が登場する。元禄頃には出版業者の組合である「書林仲間」が成立し、享保年間には町奉行によって公認された（京都では元年(1716)）。町奉行の支配のもとで、出版業者は「書林仲間」の間で開版（新規の出版）などを自主管理していたのである。書肆の出版権（板権）も公認されており、分割も可能な財産となっていた。書肆は、出版物の編集・製作から、卸や小売、さらに古書流通まで担う、いわば出版を統括的にプロデュースする存在であった。

檜（橋本常祐）は、文久２年（1862）には書林仲間の書類に名前が見えている。檜書店所蔵の当時の文書からは、山本長兵衛をはじめ他の書肆から謡に関する書の版権を譲り受け、謡本書肆として歩み始めたことが確認できる。

しかし、明治時代になると事情は大きく変わる。新政府は出版について初年から布告条例を出して管理した。明治２年には「出版条例」において出版をめぐる諸手続（出版届・出版延期届・出版取消届などの提出など）が定められ、以後、改正・強化を重ねながら、明治26年には「出版法」が制定された。

こうした状況の変化は、刊行物の刊記に見える「版権登録」「出版御届」などの文言にも反映されている。檜書店には諸願・諸届の控えも残されており、新体制への対応を迫られた様子がうかがわれる。

〔参考〕　政府による明治初期の出版統制（「出版条例」成立まで）

明治元年４月	明治政府の最初の出版統制布令。新著ならびに翻刻書類はみだりに刊行することを禁じ、官許なくしては売買不可とする（太政官布告）。
明治元年６月	出版物は出版以前に草稿を学校官へ差し出し、許可制とする。（太政官布告）。
明治２年１月	出版は所管の府藩県へ願い出て、府藩県より行政官へ伺出ること。出版済みの製本一部を行政官へ納本のこと（行政官布告）。
明治２年５月	「出版条例」公布（行政官達）。書籍出版は学校の所管に移され、出版の出願は、昌平校・開成校に出版取調所を設けて受理することとなる。
明治３年２月	書籍出版免許は大史局の所管となる。（太政官布告）
明治４年	大史局廃止に伴い、出版免許は文部省の所管となる（太政官布告）。
明治８年９月	「出版条例」改正、出版の願出は内務省の所管となる（太政官布告）。＊新聞を取り締まる「新聞紙条例」を発布、「讒謗律」とともに制定。
明治20年２月	「出版条例」改正（勅令76号）。著作権関係の規定「版権条例」が新たに設けられる。
明治26年４月	「出版条例」を廃止し、「出版法」制定（法律15号）。

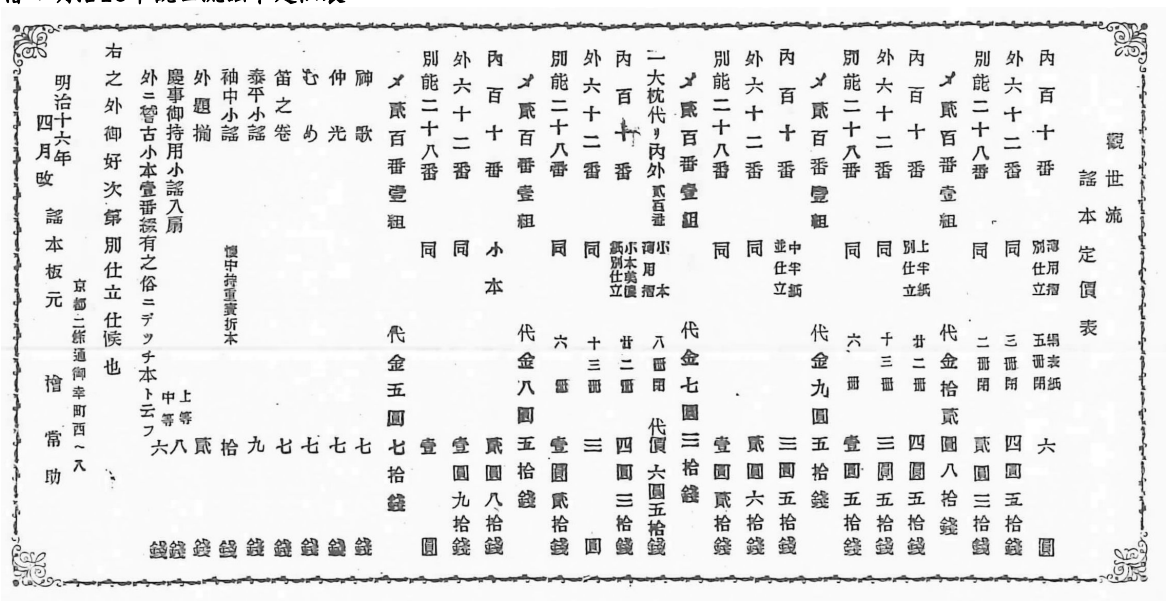
印刷技術の変遷と謡本　―木版から石版へ―

明治期の印刷は、西洋から導入された金属活字を用いた活版が主流となった。金属の活版印刷は、初期から洋書や辞書類、新聞・雑誌、公文書（布達）などで多用され、広く普及した。明治23年12月13日には印刷同業者組合も設立されている。活版印刷は、一度限りの出版物（再版をしないもの）を刊行するのには最適の方法だった。

そのような中で、謡本印刷においては30年代後半まではなお木版が多用されていた。謡本に関しては、すでに作られた版を再利用可能なこと（この点については経文や古典文学作品等も同様）、微細な記号やふりがなが入るので一字一字の活字を組む印刷法（活版）よりは整版に適していたこと、元になる版（版木）が財産として受け継がれていた木版刷のほうが対応しやすくかつ経済的であったことなどが理由であろう。

後に謡本も木版印刷を脱するが、この時も謡本印刷は活字では対応はできないので、微細な記号も使用可能な整版でありながらかつ木版よりは鮮明な印刷面が得られる銅版刷や石版刷が利用された。新興の出版社は、謡の稽古に通わなくても謡えるような詳細な指示（＝「直シ」）入りの謡本を、明治初期から石版刷で出版し始めている。檜も世の中の動向には抗えず、明治32年（1899）から刊行を始めた内外別能の二百番揃本には遂に直シを採用し、明治41年（1908）には初めての石版刷謡本を発行した。以後は全面的に石版印刷への移行を進め、版木の出番は終りを告げることになった。

檜の明治16年観世流謡本定価表



観世流謡本定價表

内百十番　御用摺　別仕立　黒表紙五冊閉　六圓
外六十二番　同　三冊閉　四圓五拾錢
別能二十八番　同　二冊閉　貳圓三拾錢
〆貳百番壹組　代金拾貳圓八拾錢
内百十番　上半紙　別仕立　廿二冊　四圓五拾錢
外六十二番　同　十三冊　三圓五拾錢
別能二十八番　同　六冊　壹圓五拾錢
〆貳百番壹組　代金九圓五拾錢
内百十番　中半紙　並仕立　三圓五拾錢
外六十二番　同　貳圓六拾錢
別能二十八番　同　壹圓貳拾錢
〆貳百番壹組　代金七圓三拾錢
一大枕代り内外貳百番　小本　御用摺　八冊閉　代價六圓五拾錢
内百十番　小本廉價　別仕立　廿二冊　四圓三拾錢
外六十二番　同　十三冊　三圓
別能二十八番　同　六冊　壹圓貳拾錢
〆貳百番壹組　代金八圓五拾錢
内百十番　小本　貳圓八拾錢
外六十二番　同　壹圓九拾錢
別能二十八番　同　壹圓
〆貳百番壹組　代金五圓七拾錢
神歌　七錢
仲光　七錢
むめ　七錢
笛之卷　九錢
泰平小謡　拾錢
袖中小謡　慢中持重實折本
外題揃　上等　貳錢
慶事御持用小謡八扇　中等　八錢
外ニ智古小本壹番綴有之俗ニデッチ本ト云フ　六錢
右之外御好次第別仕立仕候也
明治十六年四月改　謡本板元　京都二條通御幸町西ヘ入　檜常助

宮本圭造氏「檜書店創業のころ（下）」（『観世』平成15年４月号）より

＊上記謡本は、内百十番・外六十二番・別能二十八番を合わせて合計で二百番の揃本となる。

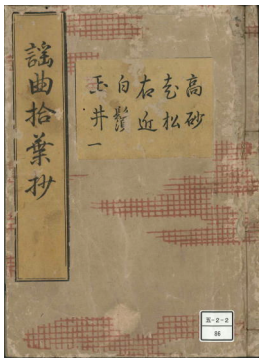
＊観世流の所演曲について

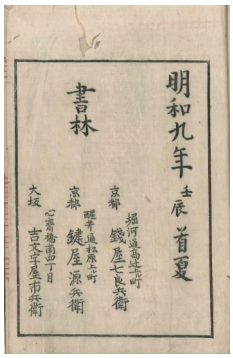
刊行謡本の番数（揃本）や曲の組合せは、時代や書肆によって異なっており、現在では、表章氏による整理に基づいて略記されることが多い。（『鴻山文庫本の研究』・『鴻山文庫能楽資料解題（上）』に掲載の「上掛り版本番組表」「下掛り版本番組表」参照。）以下、同表の記号で記す。

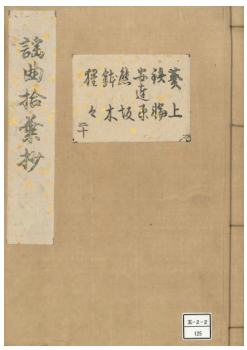
江戸期を通じて最も流行した組合せは、内組Ｆ（後組、第６冊の第１曲が竹生島）の100番と外組ｅの100番で200番、あるいはさらに外組ｆの30番を合わせた全230番であった。これは、貞享3年9月の山本長兵衛刊本（内組Ｆ後組）刊行以降、幕末まで続く。

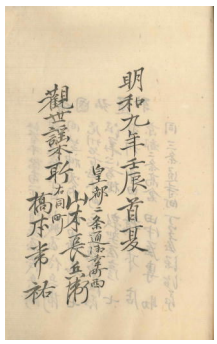
一方、山本長兵衛は天保11年、内組M110番（正徳６年刊行）に対応する外組ｋ62番・別能28番（外組１）を刊行し、新たな組合せが登場した。山本長兵衛は、外組・別組刊行の際にこの全200番の曲目を列記した『外題揃』も刊行している（＊『外題揃』に関しては、後掲の板木Ｕを参照）。明治期には、別能が所演曲に昇格したことに加え、檜が明治12年から宗家の協力を得て揃本（明治本）を刊行したことによって、この組みあわせが定着した。以後、昭和初期までこの組合せが正規のものとなった。総数は、別に復活・編入・新作が９番あって、大正末年の観世流謡本は全209番となった。

謡曲拾葉抄　表紙（巻一）・刊記（巻二十）
刊　半紙本　２冊　明和九年　（京）銭屋七良兵衛ほか









謡曲拾葉抄　表紙（巻一）・刊記（巻二十）
刊　大本　２冊　　（京）山本長兵衛・橋本常祐
〔伊藤正義文庫〕

檜の木版出版略年譜

檜家初代の常祐は仏書の刊行から出発し、観世流謡本書肆の山本長兵衛から相次いで版権を譲り受け、謡本を出版するようになった。下に、檜が出版した木版本を年代順に一覧にした。初期に山本との連名になっているのは、主力の謡本書肆であった「山長」の名を借りたためで、版権譲渡後も、檜は「奥書名前印料」を山本に支払っていた。

明治12年以降は単独刊行になるのは、それまではサイドビジネスであった謡本刊行に力を入れるようになったためであった。この年から、内外組の五番綴謡200番の揃本の刊行を始める。これは明治になって初めての揃本であり、また観世流宗家の観世清孝との提携のもとで刊行されたものだった。また、謡本の版権取得を試みていたが、これは難航した。

明治16年頃から24年頃までは一時経営状況が悪化するが、やがて持ち直し、明治26年に新たな二百番揃本を出版、版権登録も認められた。その後は、金剛流の謡本の版木を買い取るなど、事業も順調に拡大していった。

檜書店木版出版略年譜		＊「版本と版本」欄は展示した版本の記号。青色部分は版本を展示していることを示す。 ＊「書名」欄が赤色のものは、センター蔵の版本に含まれているもの。 ＊揃本の刊行後に出版される一番綴本、および後刷は基本的には省略した。			
版本と版本	刊記	書名	書型・冊数など	出版者	備考
	慶応02年孟春	観世流内百番謡本	五番綴小型中本 20冊	山本長兵衛・橋本常祐	奥付「正徳三年癸巳仲春吉辰／慶応弐丙寅孟春再板」の年記と両人の住所名のみ。
	不明	観世流内百十番謡本	五番綴半紙本　22冊	山本長兵衛・橋本常祐	奥付「天保十一年孟春」
	不明	謡曲拾葉抄	大本　20冊	山本長兵衛・橋本常祐	奥付「明和九年壬辰首夏」。明和９年銭屋・健屋刊と同版の後刷。 版権譲渡は康応元年（丁字屋源次郎・田中屋専助より）。
A	明治12年03月～14年06月	観世流謡本（内110番・外62番・別能28番）	五番綴半紙本　41冊	檜常介	天保山本長兵衛刊本の再版・覆刻。通称「明治版」。
	明治13年04月	袖中小謡嫋々の声	小形折本１冊	檜常介	文政七年山本長兵衛刊同名本の改訂本。計120曲。
K	明治13年04月	明治泰平小謡万戸声	半紙本　１冊	檜常介	編者林喜右衛門。文政６年山本長兵衛刊「昇平小謡万戸声」に近い本を切継覆刻。
	明治13年09月	仲光	半紙本　１冊	檜常介	観世清孝校合新刊
	明治14年07月	笛之巻	半紙本　１冊	檜常介	観世清孝校合新刊
D・E・P	明治14年08月	梅	半紙本　１冊	檜常介	観世清孝校合新刊
U	不明	謡外題揃	小型枕本　１冊	ナシ	明治16年４月の謡本定価表に「外題揃　弐銭」と掲載。
K	明治18年10月	明治泰平小謡万戸声	半紙本　１冊	檜常之介	明治13年版に10丁増補するが、他は前本と同版。増補部分は、文政６年山本長兵衛刊「観世小謡万声楽」からの転刻。
T	不明	改正拍子筌／内百番	中本　１冊	檜常之助	「明和二乙酉初夏日」大阪書林塩屋平助刊（田思明撰）の後印の同版本。明治18年頃以降か。
H	不明	四百番之外百番（番外謡曲五百番）	十番綴小本　10冊	檜常之助	元禄11年田方屋刊、正徳５年に林和泉掾による後摺本あり。
	明治19年05月	〔銅版刷〕改正観世流謡字引	小型枕本　１冊	石田忠兵衛・町田與三吉	編集者 上羽為貿、謡板元発売所 檜常之介、発売人 堀井與三郎、松本善助
	明治20年08月	木曽	半紙本　１冊	檜常之助	
	明治24年09月	高野物狂	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉訂正
Q	明治26年02月～	観世流謡本（内外別能二百番）	五番綴半紙本　41冊	檜常之助	天保本覆刻の改版。奥付には天保本の奥付も併せて掲載。観世清廉訂正・観世織部。
	明治26年03月	忠信	半紙本　１冊	檜常之助	
L	明治26年08月	〔銅版刷〕改正観世流謡字引	小型枕本　１冊	檜常之助・町田恒吉	著作者林喜右衛門。前本と同版の増補本、末尾に１丁追加。
	明治26年10月	墨謡　内外	中形横本　２冊	檜常之助	
	明治26年頃	謡曲拾葉抄	大本　20冊	檜常之助	明治初年頃刊の山本長兵衛・橋本常祐刊の前本と同版後刷。奥付一部改変。
	明治27年06月	番外新組（七番）	半紙本　１冊	檜常之助	「仲光、むめ、笛之巻、木曽、楠露、高野物狂、菊士童の」７番。
	明治27年06月	神歌	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉訂正
	明治28年06月	明治改正　観世小謡大成	中形横本　１冊	檜常之助	計342曲。直しはないが、版面鮮明。
	明治30年04月～31年06月	謡曲大成	半紙本　５冊	檜常之助	細字を以て200番の独吟小吟を網羅した直し入り独吟本。
	明治30年05月	いろは順　小謡集	半紙本　１冊	檜常之助	計47曲の小謡。大西謙斉（鑑一郎）の明治30年春の跋文あり、大西の編。
	明治30年07月	楠露	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉訂正
	明治30年11月	乱曲集	半紙本　４冊	檜常之助	上・中・下と増補で計30曲。増補冊のみ奥付あり。上中下３冊分は、貞享４年山本長兵衛本の覆刻。増補冊には「笠取・蛙・倶利伽藍落」の３曲所収。
	明治31年02月	改正直し入　独吟集大全	小形横本　１冊	檜常之助	明治27年木崎嘉平刊「真撰　観世流小謡」（石版刷、非売品）の覆刻。
	明治31年04月	素桜	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉訂正。長野市大門町、書林増屋豊治郎売捌。
I	明治31年04月	謡曲指南抄	半紙本　１冊	檜常之助	元禄９年川勝五郎左衛門刊の『当流謡指南抄』の覆刻再版本。
G	明治31年04月	金剛流謡本内組	五番綴大本　20冊	檜常之助	明治15年12月山岸弥平刊の内百十番本の再版。各冊に奥付。檜刊行の最初の金剛流謡本。実際の刊行は35年頃か。43年08月頃以降の発売分は、奥付の金剛鈴之助が右京になり、住所も変わる。
	明治31年04月	金剛流謡本外組	五番綴大本　20冊	檜常之助	
	明治31年06月	明治新版　謡内百拾番	横本　１冊	檜常之助	本紙209枚の本一冊に神歌及内組全部を所収。観世清廉訂正。
	明治31年07月	豆国詣	半紙本　１冊	檜常之助	大西亮太郎訂正。
	明治31年11月	夜須良為	半紙本　１冊	檜常之助	発行所今宮神社。
	明治31年11月	座興　笑謡	半紙本　１冊	檜常之助	「口車」「石原薬くわん」「娑婆弥次郎」の３曲所収。
	明治32年06月～	観世流謡本（内外別能二百番）	五番綴半紙本　41冊	檜常之助	予約法にて月次に刊行。直し入り檜本の最初だが、一番綴は旧版。
	明治33年01月	日触酣	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉訂正。
	明治33年04月	菅田	半紙本　１冊	檜常之助	観世清廉が復曲。再興担任は大江又三郎、竹村太左衛門、竹村猪八郎。
	明治33年08月	板敷山	半紙本　１冊	檜常之助	
M	明治34年06月	観世謡曲　うひまなび	半紙本　１冊	檜常之助	実際の編者は井上宗胤（京観世井上家６代目）。
C	明治35年03月	多賀	半紙本　１冊	大口祀善	大口玲瓏翁新作。古作の「多賀」とは別曲。
J	明治35年06月	奈良土産	半紙本　３冊	檜常之助	貞享４年初版の「奈良土産（奈良雪）」の覆刻。
	明治35年11月	〔石版刷〕旅之友　（内外別能）	横本　４冊	檜常之助	再版。初版をもとにした石版刷。刊記に「京都市松原通高倉東入　石田旭山印刷場写真石版」と書き添える。
	明治36年01月	〔石版刷〕独吟集	小型横本　１冊	檜常之助	印刷は、京都松原高倉石田旭山石版部印刷。「謡曲大成」から抜粋した形の小謡・独吟集。
	明治36年08月	奈良土産返答	半紙本　３冊	檜常之助	「奈良土産」とほぼ同装。貞享５年序刊「奈良土産返答」の覆刻。全４冊を全３冊に改編。
N	明治37年3月	観世流仕舞形附	半紙本　６冊	池部活三	＊明治36年12月～38年11月に檜常之助が刊行した本もあるか。
O	明治37年04月	仕舞謡大成	横本　２冊（or１冊）	檜常之助	観世流仕舞謡本は江戸期に刊行されていないので、本書が最初らしい。
F	明治37年05月	鷺	半紙本　１冊	檜常之助	大和田建樹作、観世清廉作曲。
	明治37年11月	いくさ神	半紙本　１冊	檜常之助	広瀬中佐に取材した新曲。訂正者金剛直喜。
	明治37年	清時	半紙本　１冊	檜常之助	
	明治37年	高徳	半紙本　１冊	檜常之助	
	明治38年06月	資時	半紙本　１冊	檜常之助	池内信嘉作、観世清廉作曲。
	明治38年11月	金剛流内百番謡本	五十番綴横本　２冊	檜常之助	百番揃謡本の本文を片面11行に書写、携帯に便利な全２冊本の形で新刊。節付けをした今井の死後、外組の原稿は金剛直喜が再訂正して右版刷で刊行。
	明治39年11月～41年6月	観世流謡本（内外別能附番外乱曲）	半紙本　45冊	檜常之助	旧来の半紙判一面７行を宝生流謡本に倣い一面６行に書き改めたもの。木版刷り直し入り。版下筆者田村邦太郎。校正不備で後に絶版となった。
	明治41年03月	観世流謡本（内外別能稽古用一番本）	一番綴半紙本	檜常之助	明治32年版の版木を用いて新たに刊行した直し入稽古本。
B	明治41年04月	「新能楽」	五番綴半紙本　２冊	檜常之助	高木半作、観世清孝及び清廉作曲。「千秋舞、むら雲、卯花重、征露の談、鞠のいさを」、「勝軍の祝、三韓、玉敷の雪、鳳駕迎、太刀沈」。奥付は第２冊のみにあり。
	明治41年05月	乱曲集	半紙本　２冊	檜常之助	天（乱曲上中下）・地（三曲三読物）の２冊。30年本とは少異。
	明治41年09月	三笑	半紙本　１冊	檜常之助	金剛直喜等校。
	明治42年01月以降	〔石版刷〕　内外別能　縮刷袖珍本	十番綴小本　22冊	檜常之助	通常謡本を写真で縮刷。直し入り。檜発行の揃い謡本では初の石版刷か。
	明治43年02月	〔石版刷〕改正直シ入　観世小謡大成	横本　１冊	檜常之助	奥付に明治28年発行、35年再版、43年三版。直しを入れ石版刷で刊行。
	明治44年	〔石版刷〕金剛流外百番番謡本	五十番綴横本　２冊	檜常之助	前掲本の外組。外組の原稿は金剛直喜が再訂正して石版刷で刊行。
	＊以後、「金剛流独吟小謡集」以外の新版本はすべて石版刷に移行。				
	大正04年01月	金剛流　独吟小謡集	横本　１冊	檜常之助	訂正者金剛右京（東京）編纂訂正者金剛直喜（京都）発行兼印刷者檜常之助、梅庵の序に金剛流最初の小謡版本と云う。計273曲の小謡所収。

版木と木版本

（＊書名キャプションに付したアルファベット記号は、前掲の「檜書店木版出版略年譜」に対応する。
版木の写真は、キャプションに付した整理番号で「檜書店旧蔵版木データベース」から閲覧できる。）

版木と木版本（１）　版木のサイズいろいろ

はじめのコーナーは様々な大きさの版木を並べた。版木は、原則として和本の書型に応じてサイズが異なる。謡本は実用的な「半紙本」サイズのものが最も多く作られており、センター所蔵の版木も半紙本用が半数以上を占める。「半紙本」は、半紙を二つ折りにした大きさの本を言い、この半分の大きさが「小本」である。半紙本より大きい「大本（おおほん）」（＝「美濃判本（みのばんぼん）」）は、美濃判紙二つ折りの大きさ（ほぼ、現在のＢ４判二つ折り＝Ｂ５判に相当）のもので、この半分の大きさが「中本（ちゅうほん）」である。また、縦に比べて横が長い本は「横本」という。

ただし、版木とできあがった本の大きさは常に一対一対応とは限らない。半紙本用の版木で大本サイズの紙に摺れば余白の多い大本ができる（前掲の『謡曲拾葉抄』もその例）。逆に、大本用の版木を使って作られた半紙本も稀に見られる。

センター所蔵の版木は、大きさによって下記のように分類して整理している。

半紙本用　…半紙本サイズ用の版木
半紙本大型　…大本サイズ用の版木（半紙本に仕立てることも可能）
横本用　…横本用の版木
型付用　…両面で黒・朱の二色摺書物の１丁分となる、型付の版木
四丁がけ　…半紙本用・横本用も含む４丁摺り用（片面で２丁）の版木

＊二丁張（ちようばり）と四丁張（ちようばり）

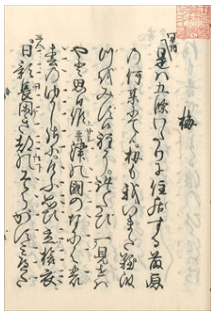
片面１丁ずつ表裏合わせて２丁分が彫られている二丁張のタイプは、四丁張に次いで一般的であり、古くは「小板(こいた)」「切板(きりいた)」などと呼ばれた。センター蔵の版木はこの二丁張のものが多い。

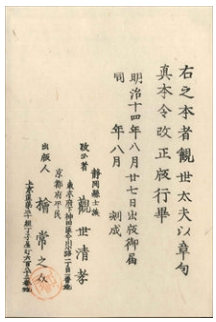
版木の片面に2丁分が彫られている四丁張は、版木に最も多く見られる形式で、古くは「大板(おおいた)」と呼ばれた。四丁掛の左右の丁は天地が逆に彫られるのが通例。表に丁付「一」と「四」の丁、裏面は「二」と「三」の丁が彫られており、丁順どおりではない。こうした構成の版木は数多く見られ、おそらく摺りの手順と関連するのであろうが、一方で丁順に表に「一」・「二」、裏に「三」・「四」という場合もあり、理由ははっきりしない。

〔版木〕

D観世流謡本「梅」版木　一丁　半紙本用　147
E観世流謡本「梅」版木　一丁・三丁　四丁がけ　3024
F観世流謡本「鷺」版木　題箋・刊記　半紙本用　1300
G金剛流謡本「羽衣」版木　第一丁　半紙本大型　2251
H番外謡曲集五百番本「野中清水」版木　第一・四丁　四丁がけ　3312

〔木版本〕



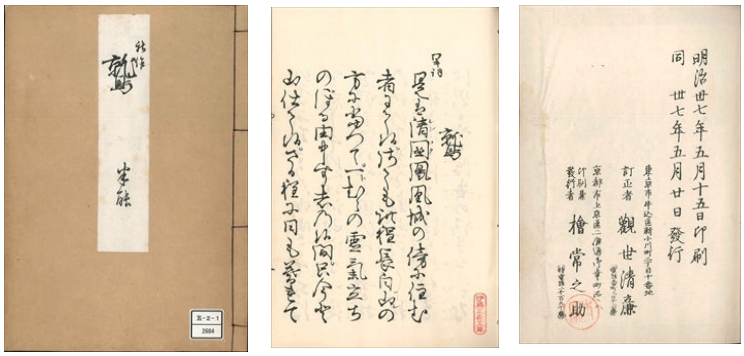


D・E・P
明治十四年刊観世流謡本「梅」
（左：表紙　中：初丁表、右：刊記）

D・E・P　　**観世流謡本「梅」**　刊　半紙本　一冊　明治十四年　檜常介

「梅」は観世流家元十五世の観世元章の新作能。明和改正謡本（＝元章が田安宗武など学者の協力で大改訂を加えて刊行した新謡本）廃止後は別能にも入っていなかったものを、新刻して刊行したもの。観世流で本曲が復活した事情は未詳。

本書の刊者は「檜常之介」となっているが、これは初代「常介」の名で刊行された書が確認されている。「常之介」は、常介の後継者の常之助らしい。事業を引き継いだのは明治17年頃か。刊者を「常之介」とするものが一時期散見されるが、大半は「常之助」。本書は刊記を14年とするが、実際の刊行はもう少し後年であろう。



F　**明治三十七年刊観世流謡本「鷲」**
（左：表紙　中：初丁表、右：刊記）

F　**観世流謡本「鷲」**　刊　半紙本　一冊　　明治三十七年　檜常之助

雑誌『能楽』の依頼による日露戦争当時の時局新作曲。大和田建樹作詞、観世清廉作曲。清国を狙うロシアを鷲にたとえ、天女姿で登場する愛新覚羅氏（清国の太祖）の母仏庫倫女が持つ神変奇特の木の実を奪おうとするところを義経（＝成吉思汗）が退治するという内容。上演にあたって諸般の理由により半能に改作され、後シテは豊葦原の神とされた。

明治37年３月21日観世宗家舞台において軍資義捐金能で観世清廉が初演、同年６月４日片山献金能で片山九郎三郎がつとめた。刊行された謡本も半能の改作版。

G　**明治三十一年刊金剛流謡本「羽衣」**
（左：表紙、中：初丁表、右：刊記）

G　**金剛流謡本「羽衣」**　刊　大本　一冊　明治三十一年　檜常之助

金剛流の刊行謡本は、明治15年大阪の山岸弥平刊のものが最初であった。この本は売れ行きが悪く、版木が入質されたのを、金剛流の後援者が金剛謹之輔を通じて檜に持ち込んだとされている。以後、檜が金剛流謡本の発売元となった。

展示資料は五番綴20冊の内百番揃本とそれに続いて発売された一番綴本で、刊記は同じ。訂正者「金剛右京」（23世宗家）となっているが、改名前の「金剛鈴之助」の刊記が本来のかたちなので、本書は改名後の明治43年８月以降の発売分。金剛直喜は京都野村家の後継者で、後の謹之輔。野村は金剛の高弟で、父の禎之助と二代にわたって金剛性を許されていた。嫡男の初世巌が、23世右京没後、金剛家の廃絶に伴い、京都金剛家を立てた。

H〔参考〕

元禄十一年刊番外謡曲五百番本

「三尾・紅豚・野中清水・農龍・五節」"

左：表紙、

中：「野中清水」初丁表

右：刊記

〔参考〕H **元禄十一年刊番外謡曲五百番本「三尾・紅豚・野中清水・農龍・五節」**

刊　小本　一冊　　元禄十一年　（江戸）田方屋伊右衛門

五番綴全20冊の番外謡本。貞享３年刊の三百番本、元禄２年刊の四百番本（ともに京都の林和泉掾刊）に続いて刊行された。当時の将軍綱吉・次代家宣の稀曲好みが謡本に反映したと言われている。本書は刊者は異なるが、三百番本・四百番本に装幀・版式も似せており、節付方やその精粗が曲によって異なる点も共通している。本書は特に下掛り節付けが多く、三分の一に及ぶ。

なお、後に林和泉掾がこの版木を入手し（＝求板）、奥付をあらためて正徳６年に後刷本を刊行している。

〔江崎家旧蔵資料〕

檜版「番外謡曲五百番本」について

元禄11年田方屋刊の五百番本は、左記の通り、三百番本・四百番本を出した林和泉掾によって刊行されたが、その後、明治に至って檜常之助によって重版されている。田中允氏蔵本によると、先行本と同版同体裁ながら、十番綴全10冊で１冊の組合せが全く異なる。表紙には新たに刷題箋を貼り付け、「観世流謡本版元　京都市二条通御幸町西　旧山本長兵衛後伝　檜常之助」の刊記を付している（伊藤正義編『版本番外謡曲集　三』「解題」による）。

下に展示したセンター蔵の版木（H）は、はしばみも溝付きの古いタイプのものであり、板も使い込まれている様子から、檜の求板と思われる。明治に刊行された檜本も同じ版木の後刷であろう。

版木と木版本（２）　近世刊行書の再版と広がり

次に、近世に出版された本の再版・改版を見よう。檜が出版した木版本には、新しく彫った版木による版のほか、古い版木を買い受けて（求板）そのまま使ったもの、あるいは手直し（埋木）をして使った例のほか、出版済みの本を版下にしてそっくりな字面の本を作る（覆刻）場合など、さまざまなパターンが見られる。

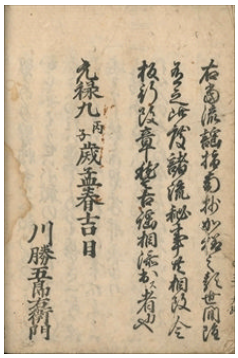
前半は、江戸期の刊本を覆刻・再版した『謡指南抄』と『奈良土産』で、これらは本文の版木も一部残されている。後半に掲げた『観世謡曲うひまなび』と『明治泰平小謡万戸聲』は、題箋など一部の版木が残っているが、これらの内容は再版ではなく、諸書を用いて編集、作成したものであった。

版木はまた、本の中身を印刷するためだけではなく、表紙に貼り付ける題箋、何冊かで共通して用いる奥付や刊記のほか、本の包紙（袋）など、本に関わるさまざまなパーツを作るのにも使われていた。センター所蔵の版木は謡本が大半を占めるので、とりわけ謡本の表紙題箋の版木が多く、五番綴本用、一番綴本用とかなりの数が見られる。これらはまとめて摺って、後で一つずつに切って使われた。中には、本の中身は石版刷ながら、題箋のみ木版刷という『明治改正観世流謡字引』のような例もあり、木版という印刷法の手軽さもうかがわれる。

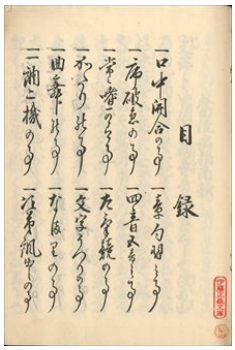
〔版木〕

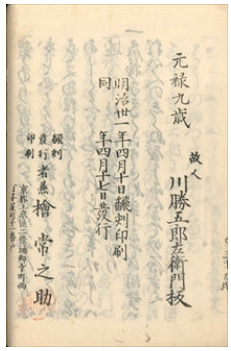
I『**謡曲指南抄**』**版木**　目録　半紙本用　1448
J『**奈良土産　上巻**』**版木**　目録　半紙本大型　2464
K『**明治泰平小謡万戸聲**』**版木**　刊記　半紙本用　1452
L『**明治改正観世流謡字引**』**版木**　題箋・刊記　半紙本用　1450
M『**観世小謡うひまなび**』**版木**　題箋ほか　半紙本用　1451

〔木版本〕



（左）
『**当流謡指南抄**』
刊記

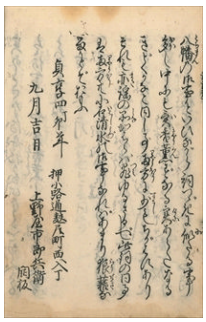




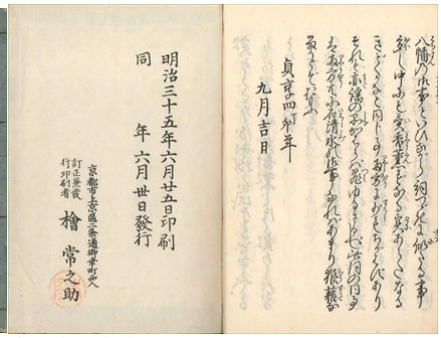
（右）I『**謡曲指南抄**』
左：初丁表（目録）
右：刊記

（左）『**当流謡指南抄**』　　刊　半紙本　一冊　元禄九年　（京）川勝五郎右衛門
刊者の川勝は、同年正月に「当流改章稽古謡」と題する観世流謡本を刊行しており、それに附属するかたちで刊行された指南書。謡指南書としては最古の刊記を持つ版本だが、内容的には承応２年刊『問謡記』と慶安５年刊『謡之秘書』とを混合させて構成した謡・拍子伝書で平易な解説書とは言い難い。独自記事は２丁の序の謡の概要部分のみ。　〔伊藤正義文庫〕

（右）I『**謡曲指南抄**』　　刊　半紙本　一冊　明治三十一年　檜常之助
元禄９年川勝刊『当流謡指南』の覆刻再版本。川勝が表紙に貼っていた目録外題の２段の目次を大きな文字で１丁に刻して（＊展示の版木）冒頭に追加した以外は、川勝本と同内容。末尾刊記のみ改訂。
元禄9年本は、その後若干改訂を加えた宝永３年版が重版されて（正徳２年・宝暦元年）流布したが、初版本が再版された形跡は確認されていない。その版権を取得して、書名を改めて覆刻したらしい。本書のような決して平易ではない書物が再刊されたことも、当時の能楽復興の気運を反映したものか。
〔伊藤正義文庫〕



（左）『**奈良土産**』**（上）** 貞享四年刊
左：表紙、右：刊記



（右）J『**奈良土産**』**（上）** 明治三十五年刊
左：表紙、右：刊記

（左）**『奈良土産』（上）**　刊　半紙本　一冊　貞享四年　上野屋市郎兵衛

上中下の三冊構成。上冊冒頭に「奈良笥標題」と題する３丁の序があり、貞享四年に薪能見物で奈良下向した折、以前から気に掛けていた謡の難点を旅宿の徒然に書きとめる由を記す。最後に「いにしへのならのみやげの油煙墨けふくさずミに匂ひぬるかな」の狂歌一首と「丁卯春二月無名野夫／攬筆南京今御門旅店」とある。所収曲目は、謡の人気曲百番だが、貞享当時の版本の内百番には含まれない曲（元服曽我・七騎落・張良・道明寺・橋弁慶・望月）もあり、また、筆者が見物したという薪能の演目とも関係がないらしい（演じられた24番のうち、葵上・浮舟・金札・呉服・猩々・大会は本書に含まれない）。

本書は注釈書ではないが注釈的文言も含み、読み物としては歓迎されたらしい。江戸時代にも、同版後刷本のほか、小型本に改版した『百番評』、また、本書に反駁した『奈良土産返答』も刊行されている。展示は序の最終丁（裏）と目録冒頭部分。〔伊藤正義文庫〕

（右）J **『奈良土産』（上）**　刊　半紙本　一冊　明治三十五年　檜常之助

貞享四年初版の『奈良土産』（左）の覆刻本で、上巻の序以下、本体はすべて初版本と同内容。刊記は、「貞享四年卯年／九月吉日」の年記は残し、刊者名を削除、裏表紙見返しに檜の刊記を添える。丁寧な覆刻で料紙もよく、続いて刊行された『奈良土産返答』も、明治後期にこの種の評判書が歓迎されていたことが推測される。〔伊藤正義文庫〕

『昇平小謡萬戸聲』左：表紙、右：見返し題

『明治泰平小謡万戸声』　左：刊記、右：目録

（左）**『昇平小謡萬戸聲』**　刊　半紙本　一冊　文政六年　山本長兵衛

頭書絵入りの小謡本。速見春暁斎画。祝言・四季謡・賀などに分類した小謡計114曲を所収。文政６年刊（刊者は当初は林権兵衛・山本長兵衛刊だが、後刷本は山本のみ）『観世小謡万声楽』の抜き刷りをまとめた別本。同書は、最も著名な文化２年刊『随一小諷絵抄』のかたちを真似て刊行されたらしい。頭書は、「謡曲十五徳図並注解」のほか、男児教訓・立花抛指南・物掛様表具之事など実用的知識を掲載し、絵図も多い。同書の版木を基にして作られた本は、本書のほか『泰平小謡万々歳』『万世小謡還城楽』（ともに文政６年山本長兵衛刊）などの小謡本、『絵本謡十五徳』など八種類に及ぶとされている。〔伊藤正義文庫〕

（右）K **『明治泰平小謡万戸声』**　刊　半紙本　一冊　明治18年　檜常之助

奥付に編集者として林喜右衛門（京観世五軒家の一つ林家の十世喜右衛門玄忠（明治44年没））の名を記す。内容は小謡（四季祝言部73曲・追福部11曲）と、頭書部分に「男児教訓・節之名数・口中開口之事・能起源・外題揃・小歌論議語り・謡曲十五特注解」を載せる。本書は、同じ書名を持つ全13丁の無刊記本（「謡本所／檜常介」）と明治13年刊本（「出版人／檜常介」）が先行しており、その増補版。文政６年山本長兵衛刊『観世小謡万声楽』の抜刷異名本『昇平小謡万戸声』の部分的な覆刻で、増補部分は『観世小謡万声楽』からの転刻。〔伊藤正義文庫〕

『改正観世流謡字引』（表紙・刊記）

L『明治改正観世流謡字引』（表紙・刊記）

『改正観世流謡字引』　　刊　枕本　一冊　明治十九年　檜常之助

江戸期に刊行された謡字引類（宝暦10年刊『謡字引』や明和７年刊『外謡字引』）を模倣し、当時の観世流謡本（檜本）全曲の、難読または誤読されやすい漢字（送りがな類を含む）にふりがなを添え、框郭内に片面16行に刷って小型本１冊にまとめた軽便な手引書。銅板印刷によって初めて可能となった出版形態とされる。

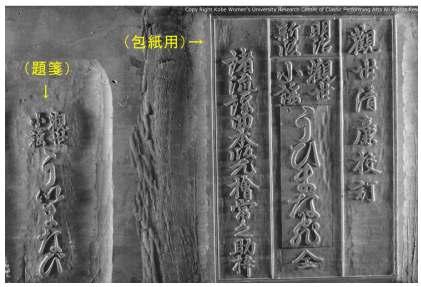
所収曲は観世流内組M・外組K・Lを併せた200番と、明治追加の４番と神歌。目録に「新曲三番」とし、本文でも「仲光」の下に「新三番」と注しながら、目録・本文とも「木曾願書」を加えた４番なのは、檜書店が同曲の謡本を新刊したのに伴う奥付年記直前の増訂の結果か。〔伊藤正義文庫〕

L**『明治改正観世流謡字引』**　刊　枕本　一冊　明治二十六年　檜常之助

明治19年刊『観世流謡字引』の増補版。末尾に１丁を追加し、「木曾」（「木曾願書」を改題）と「高野物狂」「楠の露」を加えている。前本同様に銅板刷ながら、題箋は木版刷。奥付も一部変更され、著作者として林喜右衛門の名を記す。前本の出版人石田・町田から檜が版権を譲り受け、名義上の著作者として林の名を借りたらしい。版権登録申請のために著者が必要だったことによるか。

林は、檜が明治16年に観世清孝と提携した際にも証人となっており、檜とは縁が深かった。前掲『明治泰平小謡本万戸声』（明治18年刊）の編者ともなっている。〔伊藤正義文庫〕

M　『観世謡曲うひまなび』表紙



M『観世小謡うひまなび』版木

M**『観世謡曲うひまなび』**　　刊　半紙本　一冊　明治三十四年　檜常之助

著作者は観世清廉。二行程度の一口謡から段謡・ロンギ謡の長大なものまで、85曲（曲数は43で85章所収）を収める。前付は道歌など３丁。奥付の前に観世清廉の跋文があり、「京都門下亡井上宗胤」の集め置いた本が「斯道ノ初入門」に適当なので版行せしめたという。実際の編者である井上宗胤は、京観世の井上家の六代目。　本書に係わる版木（M）は１枚のみで、表は題箋用と販売時に使われた筒状包紙用と覚しきもの、裏側に「観世謡曲　うひまなび」の題箋用がある。（＊包紙は後掲の『仕舞謡大成』展示を参照。）書名「うひまなび」の部分は埋木。題箋が２種ある理由は未詳。

版木と木版本（3）　檜の新たな試み

檜は、近世の再版ばかりではなく、明治30年代に入るとそれまでにはなかったタイプの本も出版している。謡本書肆としての事業が順調であったことの証でもあろう。ここにあげた仕舞に関する二書は、江戸時代には刊行されていなかった種類のものである。

『仕舞謡大成』は、江戸時代には観世流の仕舞謡集は刊行されておらず、本書が初めての観世流仕舞謡本らしい。内組87番の分と外組44番と別能26番・新曲３番の分に分けた二冊本と全一冊本が現存するが、題箋も同じ版木に二種彫られている。

『観世流仕舞形附』は、詞章本文に動きを示す型付が朱色で入れられている二色刷のものである。この種の本も江戸期には写本ではしばしば見られるが、観世流の仕舞と銘打って刊行されたものはない。本書は版面も鮮明で、版木は表が黒・裏面が朱になっており、両面を重ね刷りすると１丁分が完成する仕組みになっている。また、版木の下方に取り付けられている足のようなものは、摺った位置がずれないようにする目印である。本書の版木は、目録や刊記の版木も含め、かなりの数が残されている。

〔版木〕

Ｎ１『観世流仕舞形附　巻三』「小塩」版木　第三十八丁　型付用　1546

Ｎ２『観世流仕舞形附　巻三』「小塩」版木　第三十九丁　型付用　1547

Ｎ３『観世流仕舞形附　巻三』版木　刊記　型付用　1701

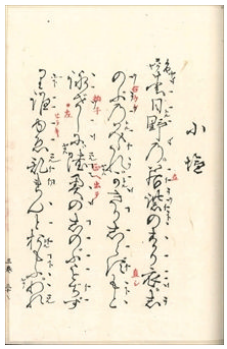
Ｏ　『仕舞謡大成』版木　別能目録　横本用　3182

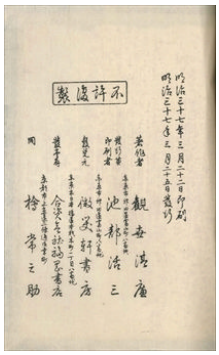
〔木版本〕

Ｎ　『観世流仕舞形附　巻三』

左：37丁表「小塩」

右：刊記





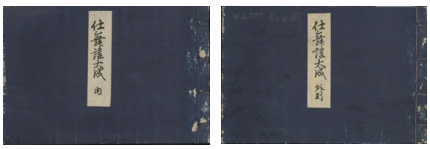
Ｎ　『観世流仕舞形附』　第三巻　　刊　半紙本　一冊　明治三十七年　檜常之助

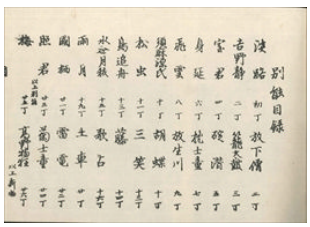
観世流の仕舞型付は、江戸期には写本は見られるものの、まとまった本として刊行はされておらず、本書が初の刊本となる。全６巻。巻一から順に25曲・20曲・21曲・21曲・24曲・24曲で計135曲所収。本書は全巻同一の刊記で、著作者が観世清廉、発行兼印刷者が池部活三、発売元が東京の微笑軒書房、発売所として合資会社福岡書店（東京）・檜常之助（京都）が名を連ねている。

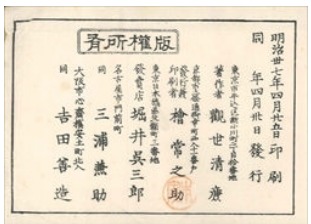
センター蔵の版木は刊記も本書と同一だが、法政大学鴻山文庫蔵本は別の刊記（巻一が明治36年12月25日、以下順に刊行され、巻六は明治38年11月18日刊、観世清廉著、檜常之助発行）を持っており、その前後関係は未詳。

Ｏ　『仕舞謡大成』

左：表紙（２冊本）、中：別能目録、右：刊記







O　『仕舞謡大成』　　刊　横本　一冊／二冊　　明治三十七年　檜常之助

仕舞に謡う部分の謡を集めた本で、二冊本は、第１冊が内組87番の分、第２冊が外組44番と別能26番・新曲３番の分。一冊本はこれを全一冊にまとめたもの。冒頭に和雪（観世清廉）の序と、２月付の凡例が掲載されている。江戸時代には観世流の仕舞謡集は刊行されておらず、本書が最初の観世流仕舞謡本らしい。

一冊本と二冊本は当初から別立てであったらしく、展示の版木の裏側にはそれぞれの題箋が彫られている。二冊本のほうは、筒状包紙に入れて販売されていたらしい。版木は外能の目録部分。一部埋木で修正が加えられている。

版木と木版本（4）　さまざまな刊記

各種の刊記の版木をみよう。刊記はその版木が使われた時期を示すものである。しかし、刊記の日付通りに刊行されたとは限らないので（現在も同様か）、実際の出版が刊記の日付より後年であることも多い。

謡本の刊記は、同じものを大量に印刷するためか、同じ日付のものが複数残っていることもある。下に掲げた明治26年刊謡本の刊記用版木も、両面ともに同じ刊記が彫られている。この揃本は、訂正者観世清廉が版権登録の手続きを行い、それを檜に譲渡したとされる。檜にとって版権登録を認められた初めての謡本であった。

また、金剛流謡本の刊記は発行者が「南陽社」となっており、譲渡を受けた版木のなかに含まれていたものか。刊記以外の部分は、明治31年の刊記で五番綴謡本（内組・外組）の揃本として刊行された。これは刷った後で製本時に捺印したことがわかる例としてあげた。

また、明治42年刊記の版木は墨色が薄いが、これはすでに石版刷へと移行しはじめた時期であり、ほとんど使われていないものかと思われる。

〔版木〕

P　観世流謡本「梅」版木　刊記・題箋　四丁がけ　3027

Q　明治26年刊観世流謡本版木　刊記　半紙本用　1453

R　明治30年刊金剛流謡本（南陽社刊）版木　刊記　半紙本大型　2395

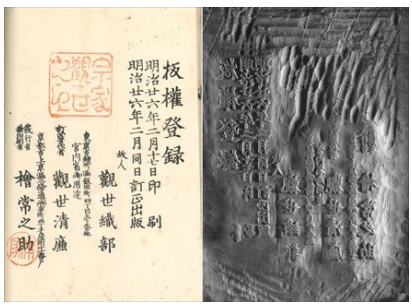
S　明治42年観世流謡本版木　刊記　半紙本用　1274

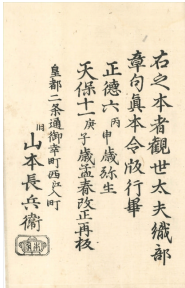
〔木版本〕

Q　明治二十六年刊観世流謡本

左：檜の刊記（最終丁裏）と版木（部分）

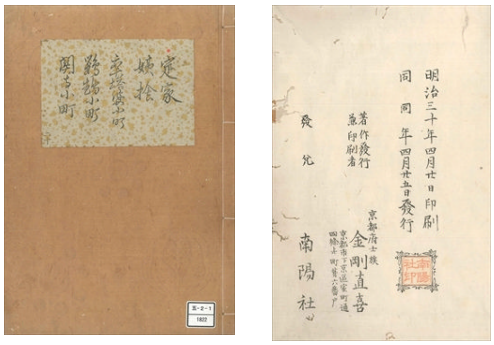
右：山本長兵衛の刊記（最終丁表）



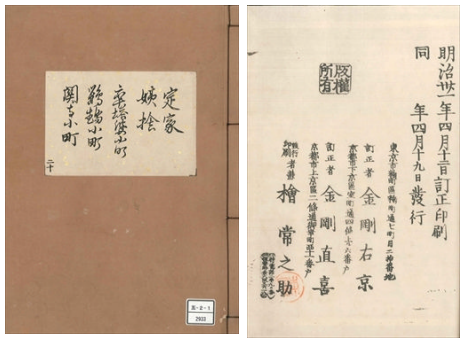


Q　明治二十六年刊観世流謡本　　「養老・清経・采女・通小町・小袖曽我」「竹生島・朝長・姨捨・柏崎・阿漕」　　刊　半紙本　二冊　明治二十六年　檜常之助

明治期に檜が２度目に刊行した内外別200番の五番綴の揃本。各冊最終丁の表に天保年間の山本長兵衛の奥付を、裏に檜の刊記を載せる。本書出版に関して、訂正者観世清廉（23世宗家）が版権登録の手続きを行い、それを檜に譲渡した。檜は、初の揃本刊行時（明治12年）から版権登録を申請していたが、謡本は著作ではないとして認められなかったため、これが檜としては版権の所有を明示した初めての謡本となった。以降の謡本には「版権所有」の文言が印刷されている。



R　明治三十年刊金剛流謡本（外組）
「定家・姨捨・卒都婆小町・鸚鵡小町・関寺小町」
表紙・刊記



明治三十一年刊金剛流謡本（外組）
「定家・姨捨・卒都婆小町・鸚鵡小町・関寺小町」
表紙・刊記

R　明治三十年刊金剛流謡本（外組）　「定家・姨捨・卒都婆小町・鸚鵡小町・関寺小町」
刊　大本　一冊　明治三十年　南陽社

金剛流謡本が最初に刊行されたのは明治15年山岸弥平刊の内組揃本で、17年には外組も刊行されている。明治31年檜刊記の謡本は、先述（版木Gおよび版本Gの解説参照）のようにこの山岸本の版木が檜に持ち込まれて刊行されたものとされているが、センター蔵の金剛流謡本の版木には明治30年刊の南陽社版の刊記が含まれている。南陽社は、金剛直喜（謹之輔）の社中。南陽社版謡本については未詳ながら、版木の埋木の状態からすると内・外百番揃で刊行されたと覚しい。檜版は南陽社と同版。　〔伊藤正義文庫〕

版木と木版本（５）　本の改訂と版木の修正

檜は、江戸時代に出版された能関係書各種の版権（版木）を得て再版をしてきたが、旧版の板木はあまり残っていない。本資料は、旧版の板木で、改訂時の字句修正も確認できる稀少な例である。

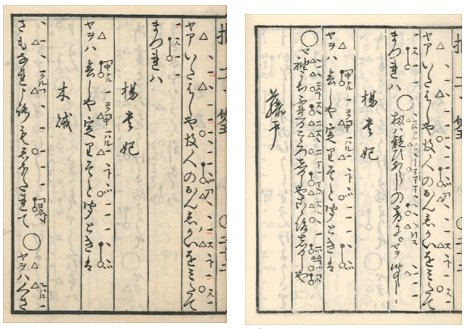
明和二年、既刊の『拍子筌』（寛政四年寺田善助刊＊）の一部を改正した『改正拍子筌』が同人（刊者名は塩屋善助）によって刊行された。檜はこの板木を購入し、明治初期に刊行している。展示した３冊は、１冊（ｃ）のみやや書型が異なり、縦長で版面の上部余白も多い。刊記は、（ａ）は広告と併記されるが、（ｂ）（ｃ）は住所のみと二種に分かれる。内容はいずれも同版である。

『改正拍子筌』の板木は19～22丁（展示分）と37～40丁の２枚しか残っていないが、後者は丁全体が改訂されているので改訂に際しての新刻であろう。この板木は、『改正拍子筌』で改訂された部分が、埋木で修正されている。20丁・22丁（天地が逆）ともに、板木の上方に『拍子筌』を下方に『改正拍子筌』を掲げている。

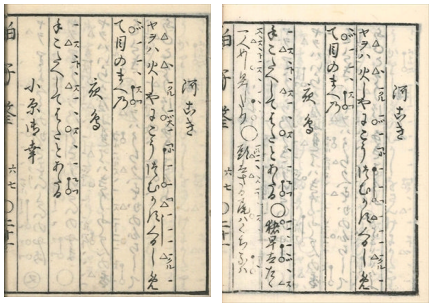
『拍子筌』は、八拍子の初歩から説き、曲ごとの謡の拍子の重要部分を示す書。間拍子と観世流節付を付した謡の文句の一節に大鼓（△）・小鼓（○）の粒を傍記して、拍子あたりを示している。＊展示した『拍子筌』は２冊とも明和二年、柏原屋佐兵衛・奈良屋善助刊。

〔版木〕T『改正拍子筌』版木　第二〇・二二丁　四丁がけ　3139

〔木版本〕
左：『拍子筌』刊記部分
中：檜版『改正拍子筌』（ａ）刊記部分
右：檜版『改正拍子筌』（ｂ）・（ｃ）刊記部分



22丁表



21丁裏

左：**『拍子筌』**　刊　中本　一冊　明和二年　（大）柏原屋佐兵衛ほか　〔伊藤正義文庫〕
右：**『改正拍子筌』（a）**　刊　中本　一冊　檜常之助　〔伊藤正義文庫〕

版木と木版本（6）　特別サイズの版木

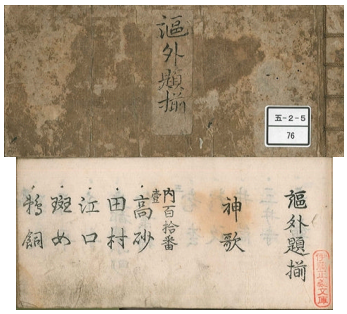
この版木は片面６丁掛、表裏で12丁張という版木で、これで一冊の本となる。判型が三切サイズの横本で、上下方向に３丁分並んでいる。各丁の間の左右に裁断のための印が陽刻されているので、３丁分を摺って１丁ずつに裁断したのであろう。（摺る時は、４丁掛けと同じ要領。）４枚重ねて裁断したものを、上の段から順に重ね合わせれば、丁順が整うように３丁が組み合わされている。

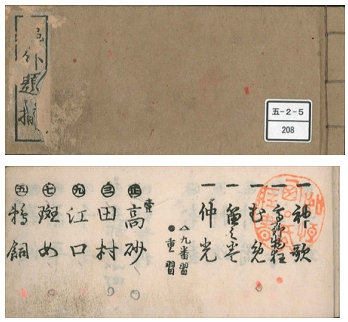
『謡外題揃』は、天保11年の山本長兵衛刊・明治12年檜刊（後掲）が知られているが、この版木で摺られたと考えられる（a）は内容が異なり、内組百番・外組百三十番に天明新十番（天明４年山本長兵衛刊謡本２冊の10曲）を加えた総数二百四十番の曲名を列記する。（内組・外組の曲は江戸期に最もポピュラーだった組合せ。）

無刊記の（b）（天保11年山本長兵衛刊と同じ）・明治12年檜刊（c）は、体裁は（a）と似ているが、別本。この２本は、冒頭に「神歌」、続いて内組百十番・外組六十二番・別能二十八番の計二百番を列記する。（c）は（b）の覆刻本だが、冒頭に明治の新曲を４曲追加し、各曲の上に季節（月）を付すなどの改訂をしている。（c）は、檜が「明治版」を売り出した際に刊行されたものだろう。

〔版木〕
U　**『謡外題揃』版木**　第一・二・五・六・九・十丁（十二丁がけ）　3180

〔木版本〕





左：　U**『謡外題揃』**　（a）　刊　枕本　一冊　〔伊藤正義文庫〕
中：　**『謡外題揃』**　（b）　刊　枕本　一冊　〔伊藤正義文庫〕
右：　**『謡外題揃』**　（c）　刊　枕本　一冊　明治十二年　檜常之助・堀井吳三郎
＊写真は左・中・右いずれも上が表紙・下が初丁表。

版木と木版本（7）
これは木版？それとも石版？　―木版刷から石版刷へ―

「皆さまにクイズです。
下に掲げた４冊はどれも同じ刊記を持つ謡本ですが、木版と石版が混在しています。
どれが木版でどれが石版かおわかりになりますか？」

明治末期、檜も木版印刷から石版印刷へと移行したが、そのことが最もよくわかるのは、明治41年３月から刊行された一番綴謡本である。これは、明治32年版の版木を用いて刊行したもので、売切れたものや版木が摩滅して使えなくなったなどの理由からだろうか、順に石版刷へと変わっていく様子が伺える。

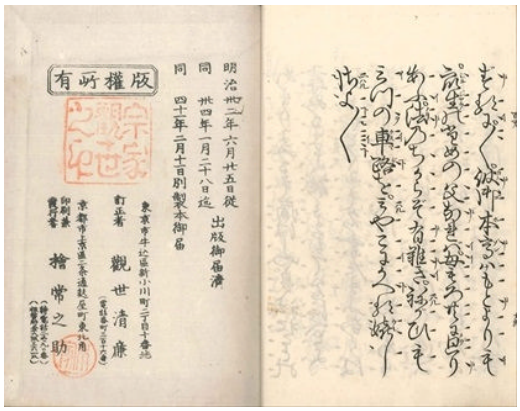
当初は本文・奥付ともに木版であったのだろうが、おそらく次第に、本文は石版で奥付のみ木版が残るもの、さらに本文・奥付ともに石版刷へと移行していったのであろう。なぜか本文は木版で奥付のみ石版というものもあるのが興味深い。

（＊クイズの正解は巻末）

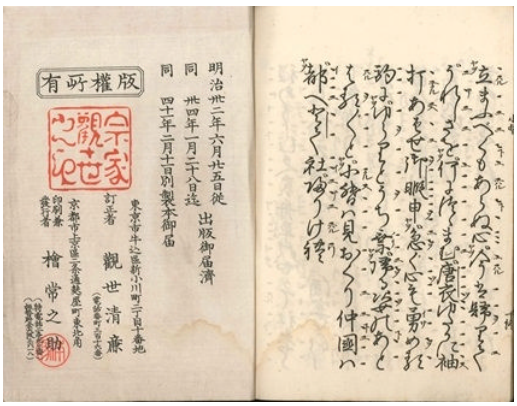
〔木版本〕

明治四十一年刊観世流謡本　　刊　半紙本　四冊　明治四十一年　檜常之助

「草紙洗小町」



「百万」



「小督」

「雲雀山」

〔参考文献〕
・宮本圭造「檜書店創業のころ―謡本書肆の近代―（上）・（中）・（下）」（『観世』平成15年２月号～４月号）
・京都出版編纂委員会編『京都出版史　明治元年～昭和二十年』（日本書籍出版協会京都支部、1991年３月）
・宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』（同朋舎、1982年）
・印刷博物館 開館三周年記念企画展『「活字文明開化　―本木昌造が築いた近代―」図録』（凸版印刷株式会社 印刷博物館、2003年10月）
・橋口候之介『和本入門』（平凡社、2005年）
・西野春雄・羽田昶編『新訂増補 能・狂言事典』（平凡社、1999年）
・表章『鴻山文庫本の研究　―謡本の部―』（わんや書店、1965年）
・法政大学能楽研究所編『鴻山文庫能楽資料解題（上）』（法政大学能楽研究所、1991年）
・法政大学能楽研究所編『鴻山文庫能楽資料解題（中）』（法政大学能楽研究所、1998年）
・法政大学能楽研究所編『鴻山文庫能楽資料解題（下）』（法政大学能楽研究所、2014年）
・早稲田大学演劇博物館編『早稲田大学演劇博物館所蔵　特別資料目録５ 貴重書 能・狂言編』（早稲田大学演劇博物館、1997年）
・丸岡桂著・西野春雄補『古今謡曲解題』（古今謡曲解題刊行会、1984年）

（p.25クイズ解答：
上左…木版、上右…奥付のみ木版、下段左…石版、下段右…奥付のみ石版）

「版木と近代の木版本　―檜書店旧蔵の版木から―」展示図録

会場　神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
期間　2018年7月2日（月）～8月31日（金）

公開　2018年８月10日
編集　神戸女子大学古典芸能研究センター
（展示担当　非常勤研究員 大山範子）
〒650-0004　神戸市中央区中山手通２丁目２３－１
神戸女子大学教育センター２階